2022 奨励研究「大学・短期大学部クォーター制導入の研究」報告書

目次　緒言

1. 目的と方法 …… 1
2. 視察結果 …… 1
2-1 保育グループ(2 校) …… 1
視察先概要・ヒアリング内容・小括
2-2 フィールドワーク・教育グループ(3 校) …… 7
視察先概要・ヒアリング内容・小括
2-3 海外研修・インターンシップグループ(1 校) … 15
視察先概要・ヒアリング内容・小括
3. クォーター制試案 …… 18
4. 考察 …… 21

緒言

大学教育を取り巻く環境はこれまでにない速度で変化しており、学生には自ら考え、主体的に行動できる力、問題を発見して解決できる力が求められている。COVID-19 対応から始まった遠隔授業やハイブリッド授業等が大学教育の様相を変え、もはや講義ノートを読み上げるだけの一方的授業では学生と社会の要求に対応できない。知識の付与と同時に、留学やフィールドワーク、長期インターンシップ、ボランティアなど、大学から出て現場において学ぶことが学生の視野を広げ、社会を認識するためには効果的であり、そのような大学教育が求められている。

本学の現行セメスター制度では期間の制限があり、なかなか長期に学外に出ることができず限られた条件で活動を行っている現状にあるので、長期に学生が学外で学ぶことができる展開として時間割に一部クォーター科目を導入して展開することが有益である。

本研究は、学生が学外で学ぶ機会を創り、そのステージで学生が学修を自分のものとして取り組み学修成長度を高め、結果を出すための提案である。

全学共通教育と各学部学科が魅力的な教育を展開し、教室での座学授業だけではなく、地域や海外で学ぶことができる教育を検討する一助になれば幸いである。

1. 目的と方法

本学の使命は「建学の礎」と「教育の基本的考え方」が示すように、地域に貢献しうる国際人の育成である。少子化と高等教育淘汰の現状で、中期計画を踏まえ、教育の質を深め豊かな学びを提供するための将来構想を具現化するためには、教職員の意識をもう一段高め、より良い教育環境を提供する必要がある。本研究では、全学共通教育と各学部学科の教育をより魅力的なものにする検討材料を提供することを目的とする。

クォーター制の有効性と課題を先行研究と他大学の状況から整理し、本学で導入する場合の課題を明らかにするため、保育、フィールドワーク・教育全般、海外研修・インターンシップを中心に分担して視察インタビューを行なった。それぞれのグループ視察で、クォーター制について、その有効性と課題、対応等と本学導入への見解をまとめ、本学の方向性を考察とした。

2. 視察結果

2-1 保育グループ

－対象校の抽出と視察の目的について－

保育グループでは、視察の対象校の抽出にあたっては以下のことを重視した。

①保育者養成の教育課程を有する大学であること
②本学の学科構成を踏まえ大学１校　短大１校とすること
上記の２点を踏まえ、全国の大学のホームページを参考に、クォーター制を導入している保育士養成校一覧を作成した。2022 年 8 月現在、全国の大学、短期大学 457 校について調べたところ、クォーター制を一部の学科でも実施しているのは 28 校、そのうち保育者養成を行っている学科についてシラバス等に記載されていたのは５校のみであった。学生数や導入年度から以下の 4 校を調査対象校として、調査依頼し、第 1 候補として設定した A 大学と B 大学は残念ながら調査の受け入れをしてもらうことができなかった。第２候補として予定していたＣ校とＤ校については視察が可能となった。

表１　視察対象候補

第１候補	Ｏ県　Ａ校（大学）	⇒クォーター制からセメスターに戻している	受け入れ　不可
第１候補	Ｔ県　Ｂ校（大学・短大）	⇒「あまり話をすることがない」	受け入れ　不可
第２候補	**Ｃ県　Ｃ校（大学）**	**105 分　クォーター制**	**受け入れ　可**
第２候補	**Ａ都　Ｄ校（大学・短大）**		**受け入れ　可**

表２　質問項目

計画から導入までの準備期間はどの程度か。
クォーター制導入に移行した目的は何か。
すべての科目をクォーターにしているのか。
継続して学修することが効果的な科目についてはどのような工夫をしているのか。
学生の忙しさ疲労感はどうか。
体調不良学生などで欠席が続く場合の対応（通常より失格につながりやすくないか）
学外実習の調整はどのようにしているのか。
クォーター制を導入してどのような成果が得られたか。
クォーター制で生じた課題は何かあるか。

2-1-1 Ｃ校
訪問日：2022 年 10 月 6 日（木）10:40-12:40
インタビュー対応者：学長補佐 A 氏/教務部長 B 氏/教務部次長 C 氏

(1) 対象校概要
C 大学は 1992 年に開学した比較的新しい大学であるが、1965 年に設立された J 大学の姉妹校である。J 大学の建学の精神である「学問による人間形成」を継承し、「国際社会で生きる人間としての人格形成」を教育理念として開学している。
学部は、経営情報学部（総合経営学科）、国際人文学部（国際文化学科/国際交流学科）、福祉総合学科（福祉総合学科/理学療法学科）、薬学部（医療薬学科）メディア学部（メディア情報学科）、観光学部（観光学科）、看護学部（看護学科）がある。
教育の柱として「つながる大学」とし 3 つのつながりを重視している。その 3 つとは、「世界とつながる大学」「地域とつながる大学」「未来とつながる大学」である。また留学生も多く受け入れており、海外協定校は 32 地域、212 校である。

(2) ヒアリング内容
① セメスターからクォーター移行とその目的

C 大学は開学以来、セメスター制での学事歴をとっていた。それをクォーターへの移行したのは、2022年のことである。その目的は大きく分けて 2 つある。

その一つは特色ある教育である。その必要性の根拠として「私立大学は生き残りをかけて何かしなければならない。」ことをあげている。その方法としてクォーター制があるという。クォーター制の導入が、大学改革の一つに位置付けられるというものである。

当該校の場合、学期は春と秋の 2 つ、つまり学則はセメスターを維持している。またクォーター制と同時に変更したのが授業時間である。授業時間は 90 分から 105 分にし、7 週 13 回で担保することで、学生は短期間で学ぶことができる。この二つを組み合わせることで多様な学びと活動（交流）ができる。それら「多様な学びと活動」は対象校の特徴である 3 つの「つながる」のうち、「世界とつながる」と、「地域とつながる」の二つがクォーター制導入と関連している。具体的には世界とつながるでは、海外留学への促進である。医療系の学科では海外研修は必修でありクォーターの一期間を利用している。また地域につながるでは、「地域共創プロジェクト」という科目を学科単位で実施している。これらを行うためという目的がある。

② 準備

クォーター制を始めるのにあっては、まず学生への説明を重視し準備にあたったと言う。学生に対して、何がどう変わるのかについて説明資料を作った。当該校の場合、クォーターだけでなく、105 分授業として13回で終える仕組みとしたことで、学生にとってはより変化が大きいことがその理由である。

また実施に向けてはどの授業をどのような形態で時間割に位置付けるのか検討している。これについては、基盤科目は教務課で行うが、それ以外の部分は学部単位で時間割を立てている。

1 講目から 4 講目は通常授業、5－6 はオンライン、6 はオンデマンドのみにしている。オンデマンドは、全学共通基盤科目、大学についてもこの時間、対面で授業をしていることもある。（大学院はこの時間対面で授業を行う）学事暦はクォーターとセメスターで変わる。夏期にサマーセッション、補講やリメディアル、実習、研修を行っている。

③ 実施方法

実施方法については、主要な内容について箇条書きで整理した。

・履修登録期間については、1 年間通して、4 月の履修登録を行う。3 月下旬～4 月上旬に一年分の登録を行うため、時間割が 1 年分作成されている。なお、時間割は基盤科目以外は学部ごとに作成している。

・クォーター制における時間割の工夫としては、授業の置き方、本来は曜日を変えておきたいが（週に 2 コマ）、非常勤担当科目については、縦おき（2 コマ続き）、実習科目も縦おきが多い。今後は少しずつ横置きを増やしたい。

・学生の混乱を避けるためにも授業形態をパターン化した。週 2×7 週＝2 単位、週 1×7 週＝1 単位。ただし長期にわたって履修すべきとした一部科目ではセメスター制を残している。学部ごとに検討して残しているが、ほんの一部にとどまる。

・大学によって様々な捉え方があるが、語学は 2 単位 30 回だったが、2 単位 13 回の授業に変更した。卒業要件には変更にならない。語学の先生が授業をきっちりして、課題を出せば十分担保できると言ったので、このような形に変更した。

・学籍移動（休学願いの提出期限について）クォーターごとにするか、セメスターにするか?　と考えたが、学則はセメスターなので、学期ごとにしている。卒業、修了ごとにしている。（誤解がないように）

・今年から定期試験期間を撤廃した。多様な成績の評価方法が認められるようになったことがある。試験期間を限定せずに、13 回授業が終わり、14 回目に試験を実施する。いつ試験かについて表にして学生に提示。追再試の期間もサマーセッションを利用することもある。サマーセッションで追試などを行うことも認めている。（成績登録の期限までにそれぞれ実施）

・成績について、事務側は半年ごとに成績を出したいと言っていたが、学生にとって良いと考え、今は

クォーターごとに成績を出している。学生をきめ細かに見ている。成績の発表の機会が増えることで、欠席の傾向のある学生も、少ない科目を集中的に学ぶことができている。一つのクォーターに多くの科目をまとめることは推奨しておらず、そういった傾向のある学生は注意していく。
・同科目が年内複数展開されるため単位を落としても次のクォーターで挽回できるようになっている。
・実習などは特定の時期にすべて実施することは難しいため、補講などの措置を行い運用している。部活動などの大会なども同様に補講などで対処している。
④ 評価
評価については学生、教員双方に分けて整理すると以下のことがある。
まず学生の評価である。新入生については、初めからこの形なので問題がない。過渡期を経験した 2 年生以上の声では、「忙しい・あわただしい」という声も確かにあるが、「学ぶ量が多すぎて困る」という意見はほとんど聞こえない。1 科目週 2 回になることで、履修科目は少なくなるので週 2 回というの弊害はなかった。長期に学んだ方が集中的に学べて良い部分もある。また科目によってはセメスターで良いとしている。ただし実際に運用してみると、ほとんどの科目でクォーターになっている。
学生にこれまでのセメスターと比較してどうかと聞くと、忙しいとは聞くが、学ぶ量が多くて困るというのはないようだ。特に 3−4 年になると、2 年終わる頃には 100 単位以上とっていて、履修しなければならない科目がほとんどないこともある。
次に教員の評価である。教員の場合、クォーター制の導入前は強い抵抗があったが、導入後は肯定的な意見が多い。特に 105 分授業を導入したことで、休みが長くなり、はじめてみるとよかった。教員の科目の濃淡をつけられることもあるため、研究の時間をつくることができる。もう前のようには「戻れない」とする意見も少なくない。
⑤ 課題
課題のなかでも時間割の問題がある。時間割でいかに縦置きを少なくするかが今後のクォーターの課題だという。今年度は 2 コマ続きで実施した科目も多いが、来年以降は横置き（週に 2 コマ）で検討している。また、（課題ではないが）学生の学習時間は多少短い部分もあるが、その代わり、夏休み、サマーセッション、ウィンターセツションなどを通して補っている。一年を通して単位修得・学ぶことができるようになったことは学生にとってメリットではないかと考えている。
（学事暦には「夏季休暇」「冬期休暇」表示は短いが、実質 SSWS が休暇期間にもあたる＝留学生資格外活動許可は SSWS も休暇として適用）

2-1-2 D 校
訪問日：2022 年 10 月 18 日（火）16:00-18:00
インタビュー対応者：教学事務部教務課長 M 氏、教学事務部教務課 T 氏、D 氏

(1) 視察先概要
D 校は東京都の江東区（A キャンパス）と西東京市（M キャンパス）にキャンパスをもつ浄土真宗本願寺派の総合大学である。1924（大正 13）年に創設された M 女子学院をルーツとし、1950（昭和 25）年に M 女子短期大学となった。1965（昭和 40）年には M 女子大学を設立、2004（平成 16）年に男女共学化した。なお、短期大学部は 2006（平成 18）年に廃止されている。また 2012（平成 24）年に江東区 A キャンパスを開設している。
1967（昭和 42）年には幼稚園を開園した。1977（昭和 52）年に短期大学部に幼児教育科を設置、2003（平成 15）年には大学にも保育学科が設置された。
現在は文学部（日本文学文化学科）、グローバル学部（グローバルコミュニケーション学科、日本語コミュニケーション学科、グローバルビジネス学科）、法学部（法律学科、政治学科）、経済学部（経済学

科)、経営学部（経営学科、会計ガバナンス学科)、アントレプレナーシップ学部（アントレプレナーシップ学科)、データサイエンス学部（データサイエンス学科)、人間科学部（人間科学科、社会福祉学科)、工学部（環境システム学科、数理工学科、建築デザイン学科)、教育学部（教育学科、幼児教育学科)、薬学部（薬学科)、看護学部（看護学科）の 12 学部 20 学科体制となっている。総学生数は 9,872 人（男子 4,265 人、女子 5,607 人：2022 年 5 月 1 日現在）である。

また、大学院、専攻科、別科、通信教育部を持っている。

(2) ヒアリング内容

① 学修の効率性と質向上

同時期に履修する科目を減らすことでひとつの科目に集中できるようにする。また、1 学期に基礎、2 学期に発展、3 学期に応用科目をいれることにより、学びを体系的に積み上げられる。

②「海外留学・語学研修の促進と学外学修プログラムの充実」

2 学期に必修科目を置かないことで 6〜7 月に留学・語学研修をいれられるようにする。

③準備

2013（平成 25）年に検討を開始し、2015（平成 27）年から実施されている。また、2014（平成 26）年の 1 年間を導入に関する周知期間にあてている。なお、2020（令和 2）年からは 100 分 7 週制（セメスターの科目は 14 週）をとっている。

準備に際しては全学科へのヒアリングをおこない、懸念される点をあげひとつひとつ解消していった。またカリキュラムと教育課程の変更が検討された。M キャンパスは資格系の学科が多く、準備に時間がかかったため 2015（平成 27）年には共通教養科目と A キャンパス開講科目のみで先行実施された。M キャンパスを含む全学での実施は翌 2016（平成 28）年である。

④実施方法

D 大学では「4 学期制」と称している。100 分、7 週を 1 学期とし、1 学期と 2 学期、3 学期と 4 学期の間に数日間の定期試験日を設けている。3 学期と 4 学期の間には大学祭があるため試験も含めて 1 週間のあきができるが、基本的に学期間の休みはない。ゴールデンウィークは休みになっているものの、特に 3・4 学期は祝日にも授業をおこなっている（厳密には、3・4 学期の祝日は年末年始の休みに振り返られている)。

1 時間目が 8:50 に始まり、5 時間目が 18:30、6 時間目が 20:20 に終了する。休み時間は各 10 分間で、2 時間目と 3 時間目の間は 50 分の昼休みがある。

多くの科目は違う曜日に 1 コマずつ、週 2 回の授業をおこなっている。非常勤講師の科目や、一部の科目では 2 時間続けて時間を設定している（ただし、もともと非常勤講師への依存度は低くあまり影響はない)。2 時間続けて設定されている場合は、1 時間を講義、1 時間を演習に使うなど、考慮をしている。

先述の通り、1 学期は基礎科目、2 学期は発展科目、3 学期以降は応用科目といった配置の工夫もされている。2 学期は原則として必修科目を配置しないようにしており、この期間に短期留学や語学研修に行く学生が多い。

授業登録は、1・2 学期分を 2 年生以上は 3 月末に、新入生は 4 月入学後に、3・4 学期分は 9 月に一括で登録している。

なお、すべての科目がクォーター制（週 2 回×7 週間）になっているわけではなく、ゼミや卒業論文指導をはじめとする諸科目はセメスター制（週 1 回×14 週間）をとっている。特に幼児教育・保育系の科目については、免許・資格との関わりから、一部の教養科目を除くほぼすべての授業がセメスター制で実施されている。

⑤成果

大学側が評価する成果は、「教育効果（GPA の向上）」と「グローバル化への影響」である。前者は出席条件や進級基準が厳格化したことにより学生の履修意識が高まったことに加え、教員が長時間の授業を飽きさせないため授業改善に取り組んだことが原因ではないかとみている。後者は海外留学、語学研修への参加によるものである。

また、学生からは「週に複数回授業を受けることで集中して学べ、知識の定着が図れた」「学期当たりの試験科目数が少ないため、集中した試験勉強が可能になった」といった、前向きに評価する声があった。教員からの評価も、導入前の不安に比べると上々であるという。

⑥課題

課題としては、「欠席による学修の遅れ」「学科ごとの実施割合の差」「教員負担」「事務的コスト」の 4 点が挙げられていた。欠席した場合に 2 回分授業が進んでしまうため個別対応が手厚くなっており、学生だけでなく教員にとっても大きな負担となっている。

事務の業務は膨大になっており、試験回数の増加、課程の複雑化による学生相談、問い合わせの増加並びに難化、時間割編成、教室配置の複雑化といった多忙化だけでなく、システムの根本的な改修が必要になっている。多くの人員補充をおこなっている。

また、学生からも多忙化した、部活やアルバイトとの両立が難しくなったといった声が聞かれている。目玉のひとつであった海外留学、語学研修についても、留学志向の強い学生からは「2 学期の 3 ヶ月では短すぎる」という声があがっており、留学プログラム自体の見直しがおこなわれるかもしれない。

なお、D 大学は人工島のオフィス街にあるため学生ほぼ全員が電車で通学している。電車の本数は夜でも多く、「終了時間、帰宅時間が遅くなること」については、本学と異なりほとんど問題になっていない。

（3）小括

両校を通して本視察を通して整理することができるクォーター制のメリットと課題を整理した。

①クォーター制のメリット

C 校、D 校共通して、事前の不安に反し、教員、学生とも導入してよかったという声が多く聞かれている。教員側のメリットは授業期間が短くなることで研究時間を含む時間の余裕が生まれたこと、学生側のメリットは短期に複数回授業があるため集中して学び続けられること、一期あたりの授業種別や定期試験科目数が少なくなることで、ひとつの科目に集中できることなどが挙げられている。

授業時間が長くなることで学生の集中力が低くなるのではないかという懸念が本学でもきかれるが、両校に関してはそれらのデメリットは、「ない」とまではいえないものの、あまり聞かれなかった。教員による「集中力を途切れさせないための工夫」がこれらを支えている。

またいずれの大学も、クォーター制を活用して海外研修、短期留学等を実施することができている。

②クォーター制導入への課題

クォーター制に関するおそらく最も大きな課題は、事務局の負担である。両校ともクォーター制とセメスター制を並行して実施しており、そのこともあって時間割編成や教室配置、授業履修パターンは極めて複雑になる。人員の補充はもちろんのこと、成績管理システム等もクォーター制に対応した形に一新する必要があり、多くのコストが予想される。

時間割編成については、学生の集中力などを考えても、同じ科目を 2 時間続けておこなう縦置きよりも、別曜日におこなう横置きが望ましい。しかし非常勤講師の授業を横置きにすることは困難であるし、縦置きであっても対応が難しいケースは多くなる。両校とも非常勤講師への依存度が本学に比べると低いようであるが、それでも苦心しているポイントであるという。

学生サイドからの課題は、欠席の影響が大きくなること、授業終了時間が遅くなることで様々な活動に影響がでることなどが挙げられる。授業が縦置きの場合だけでなく、横置きだったとしても、部活動

や体調不良で一週間休んでしまうと、2 回分欠席になってしまい、挽回が難しくなる。そのため両校とも補講や個別対応に力をいれており、それらは教員の負担にもつながっている。

教員サイドでは、上記の通り個別対応の増加がある。また、授業の期別配置により、授業があまり入らない期を作ることができればよいが、それができなかった場合、研究時間の創出というメリットが失われてしまう。

両校ともクォーター制とセメスター制を併用しており、科目の分配に苦慮している。特に D 校では、資格にかかわる科目、学科はほとんどセメスターのままにしており、学科によってはクォーター制のメリットを享受できないこともありうる。

両校に共通することとして、事前の不安や危惧に比べ「やってみて良かった」という声は学生からも教員からも多いことがある。他方で大学の規模は違うものの、事務局の負担増にどのように対応するかという点も課題の一つである。

クォーターの実施率については両校で違いがあった。C 校では資格系の学科も多いが、ほとんどの科目をクォーターにしているのに対し、D 校では、教育系の学部・学科はほとんどセメスター制のままである。しかし、実施できている C 校では、資格科目であっても集中的に学ぶよさがあることを学生にもメリットとして示していた。一方、それとは逆に資格系で難しい課題もある。それは学外実習である。「1 期あけてそこで実習をこなす」というやり方は、ほとんどの科目をクォーターにしている C 校でも難しいようである。(1 品川ひろみ•加藤美帆、2-3 品川ひろみ、4-5 野崎剛毅、6 野崎剛毅•品川ひろみ)

2-2 フィールドワーク・教育グループ

2-2-1　A 校

訪問日：2022 年 10 月 18 日（火曜）13:30-15:30
インタビュー対応者：観光学部教授、副学長

(1) 視察先概要

1992 年に経営情報学部経営情報学科と人文学部国際文化学科の 2 学部 2 学科で開設された。その後は学部や学科の拡充が相次ぎ、1996 年には大学院が設置された。2004 年には安房キャンパスが開設され、2005 年には東京紀尾井町キャンパスを開設。 2012 年に看護学部、2016 年には福祉総合学部理学療法学科を開設している。観光学部のあった安房キャンパスは 2022 年 4 月に東金キャンパスに移転。千葉県内私立大学最大の学部数を擁する総合大学である。

教員が学生に対してきめ細かく支援する「アドバイザー制度」を導入していることもあり、気軽に学生が教員に相談しやすい校風。全体的に、実社会を体験することを目的とした教育に力を入れており、インターンシップや海外留学プログラムなどが充実している。また、産学連携にも力を入れており、大林組・清水建設・富士火災海上保険・高砂熱学工業・ユアテックによる寄附講座を開講している。千葉ロッテマリーンズと提携しているほか、2007 年に株式会社 ANA 総合研究所とも提携し、エアライン関連のプロジェクトを推進している。2010 年よりウォルト・ディズニー・ワールド・リゾートにおいて研修もおこなっている。さらに 2010 年には日活と包括協定を締結し、2011 年にメディア学部で映像芸術コースを開設。同コースでは日活芸術学院と東京紀尾井町キャンパスにて授業を行う。東京紀尾井町キャンパスには日活撮影所と連携した「城西/日活ポストプロダクションセンター」が併設され、学生の実践教育と同時に、テレビ・映画作品の実際の編集・MA 業務が行われる。課外活動も盛んで、代表として全国大会などに出場する団体も増えてきている。

(2) ヒアリング内容

① クォーター制現状

年間：1Q/2Q/春集中/3Q/4Q/秋集中の 6 ターム、90 分授業×15 回　主として連続開講、観光学部

が当大学のクォーター制導入の先駆者とされる。2022 年観光学部が東金キャンパスに移転、クォーター制を全学に導入年間：S1/S2/SS/F1/F2/WS の 6 ターム、105 分授業×13 回、全学部共通基盤科目の導入 Q: Quarter, S: Spring, SS: Summer Session, F: Fall, WS: Winter Session

② クォーター制導入の主な目的

週複数コマの集中的な授業を実施することにより、学びの密度を高くし、課題等のより丁寧なフィードバックと評価を行うことで、授業の質的向上を目指している。観光学部では、海外インターンシップ、短期留学などを推奨しており、夏休み・春休みではなく、1 クォーター丸々使えるようにすることが主眼である。

③ 学事歴と時間割

2 単位授業を、週に非連続で 2 回開講している。以前は週に 1 回 2 コマ連続で開講していたが変更した。通学期・通年科目はわずかであるが存続しており、いずれは削減、消滅させる方向とのことである。

全学部共通基盤科目はオンラインで開講し、その他オンライン受講は例外的な扱いとしている。今年度は「対面授業」を基本とし、また大学として「授業出席」を重視している。対面授業は月～金の 1 ～ 4 限に配置し、そして 5 ～ 6 限はオンラインまたはオンデマンドの授業をメインとする全学部共通基盤科目用の時間帯にしている。土曜日は完全休校としている。

④ クォータープログラムの充実・活用方法について

観光学部は、他学部とも協力して、インターンシップや短期留学科目を充実させている。ただし、新型コロナウイルス感染拡大や円安の影響も大きく、本年度は不確実性が高まったため、今後対応していく必要性と更なる充実化が見込まれる。ゼミ活動、論文、留学、インターンシップの時期としては F1（秋学期第 1 ターム：9 月～11 月）が多く、また海外研修プログラムは WS（冬期セッション：2 月～3 月）の時期に行っている。このようにクォーター制を活用して短期プログラムの実施などを行っている。

⑤ セメスター制への配慮・調整面について

教育課程のセメスター制からクォーター制への変更に関しては、文科省への許可が要らない（学則変更を伴わない）ので、合わせて授業も 105 分×13 回とした。

必ずしもクォーターでということはなく、一部セメスター（S1,S2 の 2 クォーター期）で行っている科目もある。例えば、どうしても S1 で授業が終わらない、あるいは通年で授業をやりたい、という担当教員からの要望があれば、認められることになっている。

⑥ クォーター制導入によるメリット

1 科目の内容を圧縮して効率を高めることができ、集中して学ぶという目標が達成できている。学生からは、特にクォーター制に対する不満の声はあまり聞かれない。そういうものだと認識している（クォーター制のタイムスパンで 1 年間大学生活を送るものと素直に受け止めている）ためと思われる。

留学生を多く受け入れており、9 月入学、8 月卒業という学生が多いが、年に 2 回卒業判定と進級判定を行っているので、こうした学生にも対応できている。単位が足りず留年したとしても、次のクォーターで単位を取れば、半年待たずに卒業することができる。日本人学生のメリットとしては、クォーターを利用して海外留学に行くことができる。また教員側のメリットとしては、年に 4 回、学生の履修科目のチェックや成績評価をするので、学生の在籍管理をしっかり密に行うことができる。

⑦ クォーター制導入によるデメリット・課題

CAP 制を重視していて、成績の良い学生は年間上限 49 単位、成績の悪い学生は年間上限 30 単位まで取得可能と定めている。これにより、3 年生の終わり頃には、成績の良い学生は 120 単位以上を取得している一方、成績の悪い学生は沢山授業を受けて沢山単位を落としているという状況である。

教員が苦労する点が、授業の立ち上げとスケジューリングである。学生はどの科目を履修するか早く決めないといけないという制約があり、登録・変更期間もクォーター制にしてから年に 4 回設置されて

おり、教員はその都度学生に指導（または確認・催促）する必要がある。また、システムの扱いが非効率的で大変である。現在のシステムは４学期対応となっており、６学期に対応していないため、教員や教務部員が手作業で行っている部分がある。例えば、クォーター科目・セメスター科目・通年科目が混在する単位数の計算などに時間と手間がかかり苦労している。さらに、学生に対して授業毎に課題を出すことは、(次回の授業で提出といった）ピッチが速くなってしまうため難しい。例えば、授業が週２回あるということは次の授業が 2、3 日後であるため提出期限が短く、ゆえに学生に課題を出しにくいのが現状である。

さらにクォーター制のデメリットとしては、学生がコロナや体調不良、怪我による入院などで２週間授業を休んでしまうと、その時点で１学期丸々駄目になってしまう、つまり、全ての科目で４回欠席となり、単位取得は不可能となってしまうことが挙げられる。ちなみに、補講は殆どされておらず、したとしても学期ごとに１回あるかないかの程度で、クォーターの場合は時間・時期的に行う余裕がないのが実態である。

⑧ 他学部・学科との連携や工夫、うまくいっている点や問題点、克服できた課題など

全学部共通基盤科目が今年度から導入され、他学部・学科と交流して一緒に学ぶ授業ができたことにはなった。しかし、当科目は全てオンラインになってしまったため、授業を通じて学生同士が直接会って対面で交流する機会は減ってしまった。

域学共創プロジェクトというものがあり、学部横断かつ学生主体で地域の課題解決をテーマにした演習に取り組んでおり、高い評価を得ている。また、アジア・サマー・プログラム（アジア８か国の学生が一緒に学ぶ国際交流プログラム）を、観光学部と国際人文学部が一緒に連携して行った実績がある。観光学部は国際人文学部との繋がり（共同企画、連携協力など）が最も多く長いので、今後も連携して様々な授業やプログラムに取り組んでいきたいと考えている。

⑨ 観光学部/他学部/大学全体/私立大学としての将来的な意向・見通し、検討中の企画構想など

大学が Times Higher Education (THE)の世界大学ランキングを気にしているため、これが教職員へ頑張るようにとの意識づけに繋がっていると思われる。また、大学全体として学部が多いので、減らす方向で構想中である。さらに、学生の定員割れに気をつけている。現在観光学部は１学科定員 100 名で、５年程前に 60～80 名に減らす案も出されたが、現在は 100 名を確保し、定員充足を維持できているので、今後も進めていく方針である。

クォーターの時期にあてはまる海外研修プログラムを考えている。留学先の大学のプログラムに任せるものや、インターンシップのようなものを検討中であり、以前実施していたプログラムの掘り起こしなども行っている。一方で円安の影響からカナダやイギリスへの留学経費高額化が検討課題である。

他大学との連携事業として、「国際大学ネットワーク」というものがあり（正式名称：国際大学間の未来ネットワーク CoIN)、城西国際大学、九州国際大学、関西国際大学と３大学で行っていて、学長肝いりの事業である。

(3) 小括

A 校クォーター制導入における実績は、比較的上手く行っているポジティブな事例である。留学生を多く受け入れており、ホテルなどへのインターンシップやフィールドワークを積極的に行っているという特徴は本学観光学部と共通している。

クォーター制を導入する際の有効性や活用方法において非常に参考になる。観光ビジネスといういわゆる職業的・実務的な知識や技術の習得に強い関心を持って入学してくる学生が多いことが推測されるので、１～３カ月の期間で道内・全国のホテルや旅行会社、観光地で実際に働いてみるインターンシップやフィールドワークの機会は、学生にとっても魅力的な学びとなり、経験知や実践力のアップにも繋がる教育効果の有効性も期待できると思われる。

課題としては、年間を通じて４タームまたは夏休み・春休みを含む６タームの教育課程に対応しなくてはならない教員の業務負担である。また、様々な理由で授業を１週間または２週間欠席してしまう学生は、その時点で全ての科目において２回または４回欠席となってしまい、セメスター制よりも単位取得不可になりやすくなる可能性や、そうした学生がより増えてしまう可能性が懸念材料として考えられる。（池見真由）

2-2-2　B 校

訪問日：2022 年 11 月 7 日（月）13:15-14:45

インタビュー対応者：国際コミュニケーション学部グローバルコミュニケーション学科・観光学科学科長、教授

(1) 視察先概要

1998 年経営学部のみで開設、2001 年に人間学部が開設され、その後 2007 年に経営学部と人間学部がそれぞれ人間科学部と教育学部に改編された。2009 年には兵庫県尼崎市に尼崎キャンパスが開設され、教育学部が同キャンパスに移転、2013 年保健医療学部、2019 年国際コミュニケーション学部が開設され、同年に経営学部が再開設されている 2020 年には、神戸市中央区に存在した旧神戸山手大学から現代社会学部が学部譲渡の形で開設されたと同時に同大学のキャンパスも譲渡され神戸山手キャンパスとなった。さらに、2021 年には国際コミュニケーション学部と人間科学部が神戸山手キャンパスに移転し、現代社会学部と人間科学部がそれぞれ社会学部と心理学部に改編された。

開学当初より GPA 制度や学生相談室や学習支援室、保健室からなる「学生支援センター」が開設されている。学生支援センターは、学習面や生活面に不安がある学生が相談しやすいように各教員が交代で常駐している。

阪神・淡路大震災において兵庫県が壊滅的な被害を受けた経緯から、2016 年 4 月に「セーフティマネジメント教育研究センター」を創設しており、センター長には全国初の危機管理責任者ポストであった兵庫県庁防災監を務め、災害や非常事態の指揮に当たった齋藤富雄を教授に迎えている。これにより 2017 年度より人間科学部経営学科では、「セーフティマネジメントコース」が開設され、無料の養成講座によって全学部の学生が防災士の資格をとれるようになっている。

(2) ヒアリング内容

① 必修科目「グローバルリサーチ」

２年生秋学期（１セメスター）に全員海外留学させるプログラムで、毎年２学年の在籍学生数約 50 名のうち、半分（25 名前後）が海外留学を実現させている。今年度は 23 名留学しており、内 22 名がアジア諸国、1 名がアメリカ（カリフォルニア州）である。ちなみに、アメリカ留学者はベトナム人留学生である。

一方、18 名が海外留学に行けず本学に留まり、オンライン講義を受講している。中には、新型コロナウイルスの影響によるキャンセル、TOEIC スコアが留学条件を満たしていない語学力の低さ、先方大学とのやり取り・手続き上の不手際によりビザ発給ができない、学生本人や保護者の海外渡航に対する懸念・消極的志向などの理由により、海外留学に参加しない学生も存在している。「グローバルリサーチ」は必修科目のため、海外留学に行けない学生においては、代わりに国内で実施可能なオンラインを活用したグローバルリサーチに関する代替授業を受講させることで補完対応している。現在は、国内他大学とのネットワークを形成・活用し、こうした大学と連携して国内留学プログラムなどのアイデアを検討中である。

留学の派遣先は、フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、インドネシア、台湾、韓国、中国など

英語を第二言語とするアジア圏が中心である。中にはTOEICスコアが高いなど英語力の優れた学生は、アメリカやカナダなどのネイティブ英語圏へ留学している。留学先をアジアに選定する理由として、欧米諸国よりも航空券や生活費などの旅費が安いこと、欧米諸国よりもアジアの方が日本から近く保護者の安心度が高いこと、アジアは治安の面でも比較的安全であること、日本人学生はネイティブな英語圏の人と話すよりも同じ第二外国語を英語とするアジアの人と話す方が、より自信を持ってコミュニケーションを取ることができることなどが挙げられる。

当プログラムは、16単位（専門科目14単位+レポート2単位）を取得することが必須となっている。留学先の大学で学生たちが所属する「グローバルビジネス専攻」および「多文化共生専攻」のそれぞれの専門に合った授業科目を選択して履修し、単位を取得することになっている。また、留学を実現するために、1年生～2年生春学期までの1年半で、各専攻における基礎知識の習得と英語力の向上を目指したカリキュラムを展開している。特に語学力に関しては、TOEICスコア450点以上という明確な目標値を設定している。目標値に満たない学生は、2年生秋学期の海外留学プログラムに参加できない（国内/本学に留まる）という条件になっている（留学受入先大学との合意に基づく）。

学修支援センターと協力して、グローバルコミュニケーション学科の学生にはTOEICスコア450点以上を取るため毎回TOEICのテストを受験させているが、これが学生にとって大きなプレッシャーとなり重い精神的負担となってしまっている側面がある。また、海外留学できない＝必修科目を取得できない＝卒業できない、となると問題になってしまうため、留学できず国内/本学に留まっていても「グローバルリサーチ」という科目16単位を履修・取得できるようなかたちに軌道修正したという経緯があった。一方、TOEICスコアが足りず海外留学に行くことができない学生は、「他の友達はみんな海外留学に行けるのに自分だけ行けない、日本/本学に残っていないといけない」と落ち込んだり、学習意欲の低下に繋がっている可能性がある。実際に2年生の秋学期は多くの学生が海外留学に行っていなくなるため、本学に残って授業を受けている学生は孤独感や喪失感を感じている可能性もあり、こうした学生への配慮や対応が今後の課題と考えている。

留学できず国内/本学に留まる学生には、海外の大学で必要単位を取得する代わりに本学で必要単位を取得させるために、上述した通り別のプログラムの提供や代替科目を受講させている。例えば、短期海外研修プログラムを開講しており、そこで海外経験を積む機会を持つことも可能であるが、取得単位は2単位のみとなっている。代替科目をどうするかといった対処は、教員が試行錯誤しながら行っているが、国内でオンライン授業のみに頼った「グローバルリサーチ」の学びは、学生にとって魅力的とは言えず、つまらない内容となってしまっている懸念もあり、当学科が抱える大きな課題の一つとなっている。

学生が海外へ留学しに行く際、教員は同行しないが、学生指導は教員が国内/遠隔で全てコントロール、対応するので負担を感じている。留学/海外渡航上の必要な手続きや準備のサポート、先方大学とのやり取り等は、JTBから職員を一名採用し、大学に常駐して業務を請け負ってもらっている。留学費用に関しては、航空券代が大学負担で、その他の経費や現地に行ってからの生活費等は学生の自己負担としている。アジアに留学する学生の平均生活費は月7～8万円で十分であり、学生によってはJASSOなどの獲得した奨学金の一部から捻出しても差し支えない程の額であると言える。

大学では毎年頻繁にオープンキャンパスを開催しており、今年は3月、5月、8月(2回)、9月(2回)、12月に実施した。そこで海外留学を必修とする「グローバルリサーチ」科目について説明すると、保護者は費用負担に関して理解を示し、問題なく了承してくれているようである。ただし、保護者の経済力も影響してくることは確かであると言える（例えば、今年度アメリカへ留学した学生の親は高所得者であるなど）。

海外留学プログラムの充実を学科の売りにしているものの、アジアからの外国人留学生も多く、こうした学生にとってはアジアに留学するよりも日本に留まって勉強を続けたいと思う方が多いことも考

えられる。そこで、例えば日本国内の沖縄にある国際大学へ、１セメスターの間、国内留学させるといったプログラムの考案を現在検討中である。

② インターンシップについて

グローバルコミュニケーション学科では、海外でのボランティア活動やインターンシップが実施されている。例えば、海外の大学で日本語を教える授業のアシスタント業務や、海外のホテルなどで働くスタッフ業務といった体験や実習が行われている。一方、国際コミュニケーション学部で、昨年度開設されたばかりのもう一つの学科である観光学科では、グローバルコミュニケーション学科ほど海外留学や海外インターンシップなどへの学生派遣が活発であるようには見受けられない。観光学科はより実務的な学びを重視していて、むしろ国内の企業や沖縄など国内の観光地でインターンシップやフィールドワークが活発に行われている。グローバルコミュニケーション学科の「グローバルスタディーズ」など海外プログラム系の授業は、他学科受け入れ可であり、観光学科の学生も履修可能ではあるが、実際に履修する学生は少ない。

インターンシップ関連の授業は選択科目であり、キャリアサポートセンターが主に担当している。特に３年生向けに情報提供や受け入れ先の紹介・斡旋などを行っている。ただしセンターとしては、大学から紹介される企業のインターンシップよりも、企業独自で直接募集しているインターンシップを選んでトライするよう、学生たちに推奨している。また、当学科にはキャリアサポートセンター担当の教員がいないため、センターの職員を毎月学科会議に招き、3・4 年生の就職活動や内定状況に関する報告、情報提供、助言、および各ゼミの先生（アドバイザー）から学生への就活催促の依頼などを任せている。卒業生の就職率として学生募集の広報活動にも影響してくるので、同センターが学生のインターンシップや就職活動のサポートを、教員と連携しながら熱心に取り組んでいる。

③ クォーター制について

大学として２科目のみ、今年度よりクォーター制導入のトライアルとして実施が始まっている。「ICT」科目と「学習技術」科目である。これらの科目は週２日開講で学習効果がより発揮されるという見解からである。２科目とも第１クォーターで開講している。

トライアルとして当該２科目のみクォーター制導入を実際に行ってみた現状としては、非常に厳しいという評価である。理由は、全ての科目をクォーター制にするとそれほど問題にはならないかもしれないが、いくつかの科目のみクォーター制にするのは、授業時間割全体の運営をより複雑に難しくしており、教員の配置にも苦戦しているという状況であるためである。他学科では上手くいっているという話も聞いている。しかし、グローバルコミュニケーション学科としては現在のところ、クォーター制は導入できないと判断している。「ICT」（コンピュータ基本操作など）と「学習技術」（レポート作成など）は初年次教育で、セメスターを採用している中での学期中に、この２科目のみ学期最初の７週間に授業を詰め込むと、他の選択科目の履修状況により学生によっては後半の７週間は異常に忙しい学生と異常に暇な学生とに二極化してしまう可能性があることが指摘される。

現在、新１年生の初年次科目の２科目のみクォーター制を導入しているが、今後２年生、３年生、４年生となるにつれて、他の科目もクォーター制にするのかどうか、大学として将来的には全ての科目をクォーター制にする方針であるのかどうかは不明である。今年度春学期（第１クォーター）にクォーター制を導入した当該２科目の担当教員に対して調査を実施しており、その結果によって課題やメリット、デメリットが見えてくるだろうと予測している。

④ 他大学との連携について

札幌国際大学とは今後とも繋がりを持ち、協力・連携していく機会を持てたらと前向きに考えている。例えば、「国際大学」ネットワークの構築や提携協定を結ぶなどして、関西国際大学の学生を北海道にある札幌国際大学へ国内留学させ、お互いの大学のオンライン授業聴講や科目履修を可能にするプログラムを設置できればといったアイデアが提案された。

(3) 小括

国際コミュニケーション学部グローバルコミュニケーション学科の海外留学プログラムにおける実績は、本学国際教養学科のカリキュラムと類似している点もあり、非常に参考になった。特に、全員留学させるという方針の中でも、語学力の定めた基準に満たない学生は海外留学に参加させず、これに代替させるプログラムや授業を大学内/国内で実施しているという点は、本学でも語学力の低い学生への留学対応や、海外のことを学ばせるといった教育方針における一つの選択肢の可能性として示唆に富むと思われる。

海外でのボランティア活動やインターンシップのプログラムは魅力的で、本学の国際教養学科のみならず観光ビジネス学科でも取り組むことができ、夏休みや春休みの期間を使って実施することも可能であると考えられる。

クォーター制の導入についてはまだ実現しておらず、教員側としては将来性についても消極的な見解を示していることが分かった。現在、トライアルとして一部の科目でクォーター制の導入を実施中ではあるが、今後の実現可能性を考えた場合に、「学科としてクォーター制は導入できない」という見解を断言されていたことからも、他学部・学科との授業時間割の調整を含めてセメスター制との混同や並行走行の困難さが、本学での導入を考える際にも主要な検討課題になることが見込まれる。（池見真由）

2-2-3　C 校

訪問日：2023 年 2 月 22 日（水）9:00-10:30

インタビュー対応者：短期大学副学長、大学保育学部国際教養こども学科教授

(1) 視察先概要

明治 36 年創立看病婦学校が学園創設の起源で学園創立百年を超え、1990 年開設短期大学を母体とし、4 年制大学は 1998 年に新設した女子大だが、2024 年度以降は男女共学化する予定。短期大学、高等学校も運営している。いずれも女子のみを対象だが、短期大学については 2024 年度以降に男女共学化する予定。

1998 年人文学部人間関係学科、人文学部比較文化学科を設置し、2002 年保育学部保育学科、大学院人間文化研究科人間科学専攻、地域文化専攻（ともに修士課程）を設置した。2003 年人文学部比較文化学科を改組し、国際文化学科、観光文化学科を設置。2009 年人文学部の募集停止・改組により学芸学部英語学科を設置。2018 年保育学部に国際教養子ども学科を設置。2024 年男女共学化し、学芸学部英語学科を国際学部国際学科に改組。

英語コミュニケーション学科では在学期間の 4 分の 1 程度の期間に相当する「語学留学実習」（4 ヶ月間留学プログラム）が用意されており、審査に合格して参加が決定した学生全員に研修先の学費が給付される。また単位認定されるため休学せずに 2 年間で卒業できる。その他にも、4 週間ホームステイのプログラムやアジア各地でのボランティア研修などが科目として履修できる。

(2) ヒアリング内容

① ポイント

・バンクーバーでは本学国際教養学科と同じく「Enjoy Canada」のお世話になっている。

・TOEIC400 点が JASSO 補助金条件だが「保育英語検定」を条件にすると 200 点でも対象になる。

・海外インターンシップ：ニュージーランドのつながりのある施設で実施、保育関係や環境、ホームステイは現地の会社に依頼し、担当教員が関与し任せっきりではない。担当教員が視察する場合もある。インドネシアなどでも実施。

・留学プログラムは複数あり重ねられる部分は重ねている。オーストラリア・ニュージランドの姉妹校

とのつながり。長期成果―人間力 SEQ 心の偏差値アップしており、留学後も持続する。耐性も高まる。他学でも同じような取り組みを計画するが学内で危機管理など反対が多く実現しないケースが多いと聞いている。
・2009 年から実践、オーストラリア大使館も支援。多文化共生や障がい者施設で体験できる。11―12ヶ月の留学を 4 年間の中に収めることに苦労があった。保育実習は後半。幼稚園実習を先にして帰国後に保育実習ラッシュになる。春休みに実習を詰めている。
・保育の分野であればニュージーランドのワイカト大学をお勧めする。→日本女子大例
・「幼保英語検定」をお勧めする。JASSO 申請では TOEIC400 だがこの検定を進めていることで認可された。留学出発前 270 点でも成果を挙げて現地で勤務している。先輩の実績が後輩には魅力として映るし、先輩が後輩を育てる流れを作りたい。
② 海外研修の状況
海外幼児教育研修　期間／ 1 週間～10 日（春休み）を予定
　海外の教育・保育現場を見学し、興味や視野を広げる。主にヨーロッパの教育・保育施設を視察する研修。現地の教育・保育施設を見学したり、社会福祉セミナーに参加したり、さまざまな角度から海外の教育・保育事情を体感する。教育や保育の先進国として知られる欧米での視察を通して、日本の教育・保育を客観的に見ることへとつなげる。
海外幼児教育インターンシップ　期間／ 3 週間（春休み）を予定
　ニュージーランドの保育施設で日本の教育・保育との違いを学ぶ。2 月中旬から 3 月初旬までの約 3 週間、ニュージーランドで行う実習。プログラムは語学研修と職場体験。最初の 1 週間は現地で英語の授業を受け、その後 2 週間は保育施設で現地のスタッフと一緒に働く。
☆国際教養こども学科は 3 年次に、提携校に約 11 か月留学。最初の約 3 か月間は各提携校で英語を学び、その後約 7 か月間は保育士資格取得コースで講義と実習を通じて「英語で保育を学ぶ」という明確な目的を持って学修する。実習は、オーストラリアの保育所で約 7 か月間のうちに計 120 時間行い、オーストラリアで保育する力を身につける。さらに、保育コースで 17 科目を学び、保育実習を行うことで、オーストラリアの保育士資格（Certificate Ⅲ in Early Childhood Education and Care）取得をめざす。
＊実習費として年間 10 万円 4 年間 40 万円を授業料に計上。
必修「海外保育フィールド・スタディ」(オーストラリア・ニュージーランド)
1 年次の夏休みにニュージーランドに約 2 週間滞在し、現地の保育施設にて実習。
語学力問わず、1 週目英語学校、2 週目保育施設。2 週間で 40 万ちょっと、前提で実習費年 10 万 4 年間徴収。不足は大学持ち出し。JASSO 支援なし。
必修「海外保育ライセンスプログラム」(オーストラリア)
3 年次に「海外語学研修」と「海外保育留学」からなる約 11 か月間の海外保育ライセンスプログラムに参加。英語力を向上させるとともに、海外の保育士資格を取得。
＊JASSO 月額 7 万かける月数 11 ヶ月＋渡航支援 13 万＝100 万近く←短大専攻科で申請 A タイプ→四年制も
選択「海外幼児教育インターンシップ」(ニュージーランド)
ニュージーランドで語学研修と職場体験を実施。現地の保育施設で実習を行い、教育者・保育者としての視野を広げる。

(3) 小括
　クォーター制は留学などの経験があると利点を理解しているが、6 学科では難しく、非常勤・兼担の対応など課題もある。学修効率からも進めるべきであり、強力なリーダーシップで進めるべきであると

いう意見を頂いた。留学生や秋入学など外的要因があれば進め易いのではないか。
保育者養成学科での海外研修では期間や実施学年、経費の徴収方法、「保育英語検定」の取り組みなどが参考になった。（武井昭也）

2-3　海外研修・インターンシップグループ

海外研修・インターンシップグループは、留学のためにクォーター制度を導入している大学 1 校を訪問したことを報告する。また、他大学の情報から、本学にクォーターを導入するとどのようになるかを、全学共通教育の情報教育にクォーターを導入した場合のシミュレーション、時間割、履修モデルを思案したので後述する。

2-3-1　A 校

訪問日：2023 年 3 月 1 日（水）10:00～12:30
インタビュー対応者：教養教育部教授

(1) 視察先概要

A 校は、経済学部、人間科学部、人文学部の三つの学部を擁する大学である。1967 年経済学部経済学科で開学、1973 年 経済学部商学科新設し、2000 年には経済学部ビジネスコミュニケーション学科、2002 年校名変更とともに、大学院・地域経済システム研究科（修士課程）を、2004 年 経済学部現代マネジメント学科、2007 年人間科学部「スポーツ学科」「こども学科」を新設している。2016 年 人文学部国際文化学科新設とともにクォーター制を導入した。

その後、2018 年 経済学部経済学科及び経営学科、人間科学部スポーツ学科及びこども学科の収容定員増が認可されており順調に大学運営をしている大学である。学ぶ学生達は地元色が強く、7 割が県出身で地域に残る学生は多い。CDP(キャリア・ディベロップメント・プログラム：公務員、教員、税理士等、難関試験の合格を目指す独自の教育プログラム)に力を入れており、受かると授業料免除があるので、公立大学よりも選ばれる大学である。

(2) ヒアリング内容

① クォーター制導入の経緯と留意点

2016 年 4 月に新たに設置された人文学部と教養教育部においてクォーター制度を導入している。導入において「海外留学による異文化体験を通じて，海外の社会や人々の生活について理解を深める」ため、海外の大学のタームに合わせて海外留学しやすい環境を提供することを目的としてクォーター制を導入した。

クォーター制導入にあたって、2014 年から構想に入った。学部は大反対だったので、人文学部と教養教育部のみをクォーターとした。教養教育は、フラットにどれを履修しても良いのでやりやすい。協力的な教員が多いので実現できた。この大学では、早期留学を 2016 年度から行っており、75 名を分散して協定校に送っている。IELTS で 5.5 以上が平均である。そこに届かない場合は付属の語学学校に入ることになる。(IELTS5.0 で英検 2 級レベル)

＜時間割について＞

第 1 クォーターと第 2 クォーターの間に、2 日間の調整日を設けて、必要な補講などを入れて、すぐに第 2 クォーターがスタートする学年暦としている。週 1 回 2 コマ連続で行うことで、教員の負担を減らすと同時に、実習科目と講義を連続すると授業がやりやすく、講義の後に実習をしたり、講義の後にペアワークをしたりすることができる。

<将来に向けて＞

単位を、週1回 7.5 回で1単位とすることを検討している。1単位とすることで時間割が組みやすくなる。地域システム学科の申請と同時に共通教育も変更しようとしている。

② カリキュラム、時間割

集中度の高い授業の実現として、「月・木」、「火・金」をペアに週2回の授業、そして水曜日を2コマ連続にして、時間割を固定化して組みやすいように工夫をしている。7.5 コマで授業を1・2に分けて授業を「なんちゃって」クォーター科目としていた。また、学生の履修登録を容易にするため、時間割の科目に副題をつけて、その科目がどのような内容なのかが分かるようにしている。副題が時間割に書かれているため、時間割はかなり過密な状態になるが履修選択はしやすくなっているということである。

履修登録は前期、後期の登録を前期に一度にするが、履修タームを第1クォーターと第2クォーターの間に設けることで、履修の変更を行うことができると同時に、一度に行った履修登録を履修タームで変更可能としている。また、抽選を要する科目もこの履修タームを利用して行っている。

（中津川雅宣）

A 大学の時間割編成では科目配当表を作成しているが、一部抜粋して掲載する。

資料1 クォーターとセメスター混合の科目配当表

区分	科目名	配当学部			単位	1年次				2年次				3年次				4年次			
		経済	人間	人文		1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
人文系	哲学	○	○	○	2	●		●													
	倫理学	○	○	○	2		●														
	心理学	○	○	○	1		●		●												
	宗教学	○	○	○	1	●		●													
ゼミ系	基礎ゼミⅠ	○	○	○	2		●														
	基礎ゼミⅡ	○	○	○	2				●												
	教養ゼミA	○	○	○	2	●															
	教養ゼミB	○	○	○	2		●														
	教養ゼミA	○	○	○	2			●													
	教養ゼミB	○	○	○	2				●												
	基礎専門ゼミⅠ	○	○	○	2						●										
	基礎専門ゼミⅡ	○	○	○	2								●								

①初年次教育の位置付けや展開の実際

今までは、基礎ゼミナールだったが、教養ゼミと名称を変えて、4人の教員がクォーターごとに変えてやるように変えた。2/3 が一般科目で、残りは語学と入門科目としている。1年次のキャップは 44 単位である。

②卒業時の質保証取組の方策

ルーブリック、ポートフォリオ、ディプロマ・サプリメント、コモンズなどでは、全学的にはルーブリックは使っていない。キャリア教育などの測れない能力をどう測るか。EQ（心の知能指数）の方が大事だと思っている。

③国際交流・海外留学

共通教育に海外研修 I～IV は、留学で取得してきた単位を認定する受け皿として科目として置いている。早期留学、2016 年度から始まっている。75 名を分散して協定校に送っている。IELTS で 5.5 以上が平均。学生の中にはそれ以下の学生もいるが、その場合は付属の語学学校に入ることになる。

④国内および長期インターンシップ・海外インターンシップ

企業のインターンシップなどは、キャリアセンターに委員会で議論することになっている。科目の分掌としては、教養教育学部だが、教職科目やキャリア科目はセンター付きとなっている。

⑤クォーター制のメリット

クォーター制のメリット、デメリットについては、本大学の岡（2018）論文があるのでそちらを参照とのことであったので、以下にポイントをまとめる。

クォーター制には、以下の五つのメリットがある。特に、学期と休業期間を組み合わせることで期間を長くできるため、様々な留学やインターンシップ等に対応が可能となる。

- 集中的に学ぶ機会が増えるため、学習内容が定着しやすくなる。
- 履修登録の機会が 2 回から 4 回になることで，履修の選択肢が広がる。
- 留学のチャンスが広がる。（サマースクールや短期留学）
- 帰国後の履修がスムーズになる。（期間をあけずに授業を受けることが可能）
- インターンシップやボランティア活動などに参加しやすくなる。

以上のことから、クォーター制導入によるメリットが様々な面で創出されることがわかる。

⑥クォーター制導入に対する学生の意見

クォーター制度を導入したことを学生はどのように捉えているのか、アンケート調査の自由記述から抜粋する。

（メリット）

・語学を学ぶ上ではある程度頻繁にその言語に触れる必要があると思うので，語学系科目をクォーター制にするメリットはある。

・時間割次第ではあるが，従来の制度（通年）より 1 年間に多くの総合科目が取得できる。

・期末テストの時期がセメスターとずれるので負担が少なくなる。

・効率的に単位取得ができる。

（デメリット）

- セメスター制とクォーター制が混在している。どちらかに揃えてほしい。
- 一部科目が抽選形式なので，抽選結果が発表されるまで時間割を確定できない。
- 上位学年であっても抽選漏れが起きる可能性があるため，年単位での計画を組むことが困難である。
- セメスターとクォーターの組み合わせにより週 2 で授業をするため、その 2 つの曜日にセメスター科目でとりたいものがあっても取れない。
- 途中からの制度導入の際、卒業要件の科目を優先すると取りたい科目が取れなくなる。
- もっと早くクォーター制になることを告知していればここまで困ることにはならなかった。

(3) 小括

クォーター制の導入にあたっては学内の同意を取るのが難しく、学科が新設するのを機に、新設学科と教養教育部のみでスタートしている。どの大学でも起こり得ることであるが、学期の制度を変えることには相当の抵抗があることが分かる。制度導入の多くの大学が学長のリーダーシップにより進めているのは教員間でコンセンサスをとるのが困難であることを意味している。

クォーターとセメスターの混合で進めるにあたり、クォーターとセメスターの科目配当表により、振り分けの調整を図っている点は参考になる。そして、複雑な時間割を時間割の固定化によりルールができることで時間割編成を容易にできることが分かった。今後、1 単位化を目指しているとのことで、もともと 2 単位のものを 7.5 回授業にして、内容は変わらず Ⅰ、Ⅱ とすることで、時間割の融通性が増すと考えられる。

クォーター制のメリットは集中的に学ぶことができる、履修のチャンスが多くなり効率的に単位取得ができる、留学やインターンシップに出かける時の長期ものに堪えられることが挙げられる。例えば、留学の帰国後の履修がスムーズになるなど、長期に学生を国内外で活動することを容易にする。

クォーター制のメリット、デメリットを学生の視点で捉えることも重要である。今回のアンケート結

果では、第１クォーターで週２日取られると、第１が終わった後、その曜日時間にあるセメスター科目は履修できないという意見があったが、混合の場合起こり得ることで時間割編成の場合の注意点である。また、途中制度導入で起こる学生への不利益がある。卒業要件の科目優先により履修できない科目が出て来る。そして大きな課題は、教員と学生への周知である。事前に丁寧な周知が行われなければ混乱を招く恐れがあり、本学に導入の際は、時間割編成と周知が大きな課題であると認識した。

（椿明美）

3. クォーター制の試案

3-1 クォーター制の学年暦について

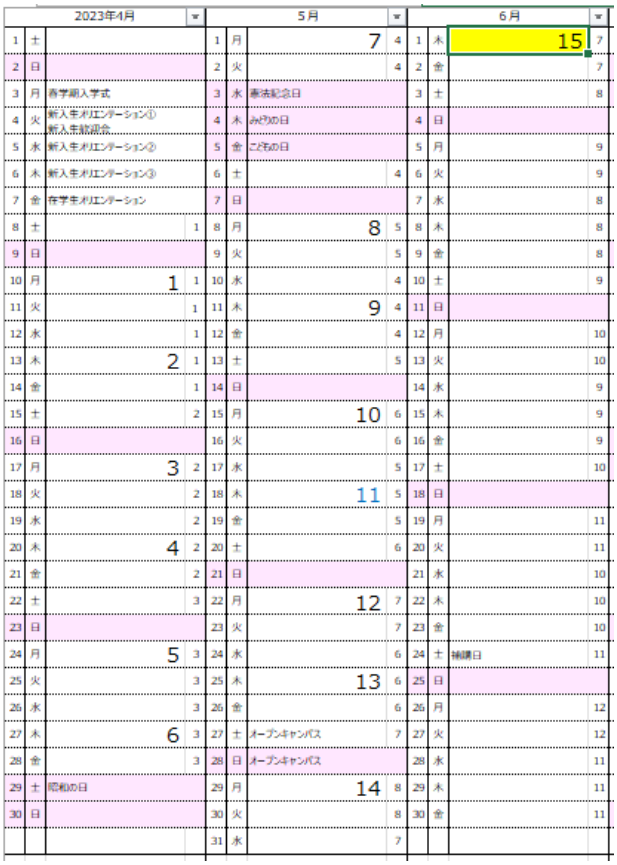
本学において学生にとってスムーズにクォーター制を導入するために、必修科目「情報機器操作」授業日の設定を検討した。

2022 年度は、「月・木」展開で最初から週２展開で実施した。その結果、春学期の授業終了から留学前までの１か月間のゆとりがあった。半面、授業期間内の学生の多忙感の声は多く、改善の必要性が見えてきた。そのため、2023 年度は、入学時の大学生活に慣れる期間にゆとりをもたせるためにも、４月いっぱいは週１展開とし、連休明けから週２展開となるように工夫することとした。

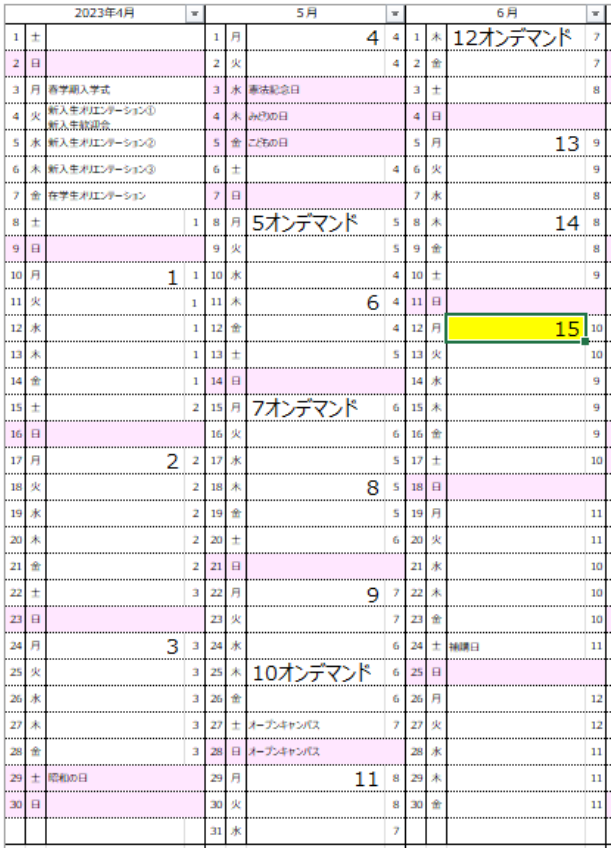
これにより、学内の LMS（manaba）やポータルサイトの利用の仕方、respon による出席登録などに慣れたころから週２展開とすることができ、学生にとっては、４月にあれもこれも覚えるという多忙感を軽減できると考えた。

また、週２回展開のうち一つ（月曜Ｉ講目）をオンデマンド授業とすることで、より学生が時間にゆとりをもって学修できるように工夫をした。

資料２　2022 年度と同様の週２展開の場合



４月を慣らし期間とした 2023 年度の展開



４月に週１展開の慣らし期間を設けた場合と、最初から週２展開した場合とでは、15 回の授業終了

日に 11 日間の差がある。これでも、留学前準備に余裕があるとすれば、本学の全体の学年歴として 4 月は週 1 展開、連休明けから週 2 展開とすることを基本とすることも考えられる。

これにより、夏季休業と合わせ、6 月中旬から 9 月末までの期間を学びの時間として有効に活用する環境を生み出すができる。（安井政樹）

3-2　シラバス

オンデマンド授業を活用することで、基本的に週に 1 回は対面で基礎を学び、それを活用して学ぶオンデマンド授業により、各自がスキルを着実に習得するというシラバスの工夫も考えられる。2023 年度の情報機器操作においては、4 月の週 1 展開の 3 回で、情報セキュリティーや情報モラルなどの知識理解、及び学内 LMS（manaba）やクラウド（OneDrive）の活用などの PC の基本操作を学修、その後 office アプリ（Word、Excel、PowerPoint）の操作スキルを高めるために対面授業とオンデマンド授業を組合せて実施するシラバスとした。　対面授業、オンデマンド授業のそれぞれの良さを生かし、組合せることにより、クオーター制による多忙感を軽減しながら、それぞれの学生のペースで学ぶことができるように工夫した。

資料 3　**対面とオンデマンドを組み合わせたシラバスの工夫例　（2023 年度　情報機器操作）**

1	オリエンテーション・AI 時代と私たち	対面	対面でのディスカッション
2	情報セキュリティー・情報モラルと関係法規	対面	対面でのディスカッション
3	AI とどう付き合うか	対面	対面でのディスカッション
4	Word（1）・いろいろなネット検索	対面	Word 基礎
5	Word（2）	オンデマンド	Word の活用
6	リーフレット交流 /PowerPoint（1）	対面	対面コミュニケーション PowerPoint 基礎
7	PowerPoint（2）	オンデマンド	PowerPoint の活用
8	Excel（1）	対面	Excel 基礎（基本関数・グラフ）
9	Excel（2）	対面	Excel 基礎（関数）
10	Excel（3）	オンデマンド	Excel の活用
11	実データを用いた分析（1）情報整理の仕方	対面	対面でのコミュニケーション 課題づくりとデータ収集
12	実データを用いた分析（2）プレゼンづくり	オンデマンド	Excel や PowerPoint を組み合わせた資料づくり
13	実データを用いた分析（3）発表会	対面	対面コミュニケーション
14	/タイピングテスト /フィルターバブル /課題フォローアップ	対面	対面でのテスト 対面でのディスカッション 対面でのフォローアップ
15	IT パスポート講演会/まとめ	対面	

対面（黄色部分）で基本操作を学び→オンデマンド（水色部分）でさらにスキルを高めるという構成にした。

理論と実践を往還させたり、基礎と活用・応用を組合せたりするなどして、学生がそれぞれのペースで学ぶことができる個別最適な学びを展開するようなシラバスの工夫も、クオーター制導入の際には、大切にしたいところである。（安井政樹）

3-3 時間割パターン

時間割シミュレーションは、以下のとおりである。

資料４　【パターン１】週に２回に授業を実施する（月と木・火と金）

例	月	火	水	木	金
1	授業 A	授業 F		授業 A	授業 F
2	授業 B	授業 G		授業 B	授業 G
3	授業 C	授業 H		授業 C	授業 H
4	授業 D	授業 I		授業 D	授業 I
5	授業 E	授業 J		授業 E	授業 J

資料５　【パターン２】　２コマ連続で授業を実施する

例	月	火	水	木	金
1	授業 A	授業 C	授業 E	授業 G	授業 I
2	授業 A	授業 C	授業 E	授業 G	授業 I
3	授業 B	授業 D	授業 F	授業 H	授業 J
4	授業 B	授業 D	授業 F	授業 H	授業 J
5					

資料６　【パターン３】　パターン１と２を組み合わせる

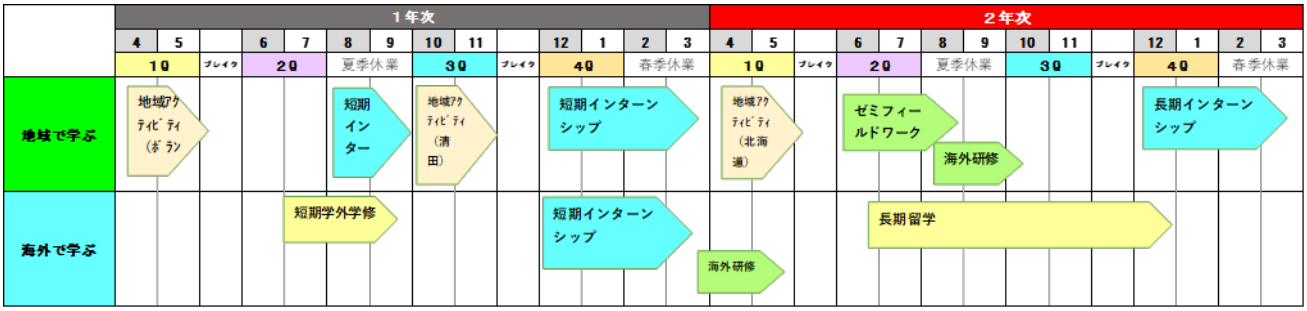
例	月	火	水	木	金
1	授業 A		授業 F		授業 I
2	授業 A		授業 F		授業 I
3	授業 B	授業 D	授業 G	授業 H	授業 J
4	授業 B	授業 D	授業 G	授業 H	授業 J
5	授業 C	授業 E		授業 C	授業 E

（安井政樹）

3-4 目的型の履修モデル

以下は「地域で学ぶ」、「海外で学ぶ」という目的のための履修モデルである。地域で学び力を付けたいのか、海外で学び語学力を付けたいのかにより、どの時期でインターンシップや留学を体験したいのかを考える必要がある。

資料７　目的型履修モデル



（椿明美）

3-5 タイムライン

今後の進め方としてタイムラインを試案してみた。すでに国際教養学科では一部導入が進められているが、他学科もどのような学びの機会を生み出すことができるのか、それによりどう学生募集に繋げて行くのか、これを学科で考えて行く必要がある。

クオーター制検討に関する　大まかなタイムライン　（試案）

（安井政樹）

4．考察

冒頭で指摘した通り、大学教育を取り巻く環境はこれまでにない速度で変化している。グローバル社会の要求する教育、ITC 環境への対応、少子化に伴う学生確保の方策、これらと COVID-19 による教育方法の対応が高等教育の改革を積極的に推進する前提になっている。そして、学生に自ら考え、課題を解決する力をどのようにつけさせるか、主体的に行動できる力をどのように積み上げられるかが求められている。

知識の付与と同時に、留学やフィールドワーク、長期インターンシップ、ボランティアなど、大学から出て現場で学ぶことが学生の視野を広げ、社会を認識するためには効果的であり、そのような教育方法の検討から時間割の工夫に繋がっていくのだと考える。

今回の視察ではクォーター制を導入している機関を対象としたため、その教育効果と課題点は共通しているが、これらを＜クォーター制を導入するメリット＞という括りではなく、＜目指す教育を実現するために年間計画と時間割を改善する＞という姿勢があるかどうか、という視点で整理したい。

(1) 何を目指すか

①海外研修・短期留学・インターンシップ・フィールドワーク等を実現する
②教員の研究時間を確保する（授業のない時期や提携校との教員交換など）
③集中して学びを深めることを可能にする
④語学で 90 分週 1 回よりも短時間継続で効果を上げることを可能にする
⑤多様な学生を受け入れるための秋入学を可能にする
⑥子ども心理専攻・幼児教育保育学科の海外研修、「保育英語検定」への取り組みを可能にする

⑦初年次教育をデジタル教育世代に合わせて変更することを実現する

(2) 目指す教育を実現するための課題は何か
①教職員・在学生の理解を得ること
②2 コマ連続科目・週 2 回科目・週 1 回科目の混在する時間割編成の対応
③成績管理システム LMS(manaba 等)の改修
④部活動や病欠による欠席に対応する補講・個別支援の検討
⑤語学力の低い学生の留学対応のためのプログラム開発
⑥並行する教育課程の必修科目や卒業要件のチェック

これらの要件に対応する具体的な検討項目として、
①全学共通教育「初年次教育」の内容変更―「学びの技法」「情報機器操作」の 4 月 5 月集中開講
②語学授業時間を 30 分または 45 分複数回実施
③検定試験対応科目の集中開講
④学生が行きたくなる短期留学・インターンシップ・フィールドワークの立案
⑤専任教員の研究期間、海外研修、現地調査環境の確立
などが考えられる。
　保育グループが指摘している「もっとも大きな課題としては、クォーターにして何をするのか、本学の、または各学科の特徴ある教育は何を軸として、どのような教育を展開していくかという明確な目的が必要であることも、本調査を通して強く感じたことの一つである。」という点が全学共通教育部、学部学科、教務部課で意識すべき点であり、重ねて指摘したい。

（武井昭也）

【謝辞】ご多忙の中で丁寧に視察対応に対応して頂いた関係大学の皆様に篤くお礼を申しあげます。

研究リーダー　武井昭也
副リーダー　　椿明美
保育グループ　品川ひろみ・野崎剛毅・橋場俊輔・加藤美帆
フィールドワーク・教育グループ　武井昭也・池見真由・平塚彰・安田純輝
海外研修・インターンシップグループ　椿明美・中津川雅宣・安井政樹・辻拓

【引用文献】
岡達哉、川澄厚志、上ノ山賢一、張　淼、河合正二、曽我千春（2018）「クォーター制（4 学期制）の課題に関する一考察― 学生アンケート調査からの示唆 ―」金沢星稜大学論集第 51 巻第 2 号
【参考文献】
石井知彦（2018）「クォーター制導入の目的と背景、及び導入後の検証」香川大学教育研究 15 巻、香川大学教育基盤センター
近田政博（2020）「2 学期クォーター制をどう見直すか －神戸大学内の議論を中心に－」 神戸大学大学教育推進機構(2020)『大学教育研究』第 28 号 57-70 頁
「明治大学総合的教育改革の実現に向け、2017 年度より全学一斉に時間割・学年暦を変更」
https://www.meiji.ac.jp/koho/press/2015/6t5h7p00000ixvuc.html （2023 年 5 月 5 日最終確認）
「福岡女子大学クォーター制導入について」
http://www.fwu.ac.jp/uploads/ck/admin/files/quarter_leaflet.pdf （2023 年 5 月 5 日最終確認）